ほうさ　第4号

1980年10月
名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

展示風より

10.4(土)～12.24(水)

むかしの絵入本展

“絵入本”といえば、挿絵入りの近世版本をさすのが一般的であるが、ここでは装丁や形状等にこだわらず、およそ書籍と考えられるもののうち、挿絵の加えられたものは、たとえば絵巻物から瓦版をも含めて、広義に“絵入本”として取り扱うこととする。とすれば、絵入本の起源は、日本ではおおむね平安時代（絵巻物の最古の遺品として「絵因果経」〈奈良時代〉があるが、これは中国（唐）伝来のものの写しであるから、一応例外とする）である。このころの絵巻物の他に、室町末期から江戸前期にかけて、肉筆彩色の奈良絵本がしばらく流行するが、最盛期は何といっても日本では近世、中国では明代末期から清代にわたり、ともに印刷技術の進歩発展と経済力に裏付けられて、より広い階層の人々が、文化を生産・享受していた時代であった。

絵入本は種類も量もきわめて多く、今回の展示では、その一部を示したにすぎないが、あるものは文学作品を説明し、あるいは文章だけでは果たしえない情緒をかもし出す役割をし、実用書・自然科学書等においては、当時の読者の視覚的な理解を助けた。このことはまた、時代を隔てた現代の読者にはさらに有益で、絵入本の歴史・風俗資料としての価値の大きさは見のがせないところである。

奈良絵本「しぐれ」

出　品　目　録

〈日　本〉

Ⅰ．古代・中世

（絵巻物）

1　源氏物語絵巻
　昭和46年複製（講談社）
　徳川黎明会・五島美術館本　5枚

2　紫式部日記絵巻
　昭和12年影印（大和絵同好会）
　蜂須賀家本　1軸

3　病　草　紙
　昭和42年影印（日本医学会）　関戸家本　1軸

4.　過去現在因果経　巻4
　昭和8年影印（尚古会）
　益田家蔵・建長6（1254）年本　1軸

5　天子摂関御影
　昭和43年影印（宮内庁）　宮内庁書陵部本　3軸

Ⅱ．近　世

（奈良絵本）

6　し　ぐ　れ　　江戸初期写　5冊

7　鶴のさうし　巻下　　同　1冊

（古活字版）

8　伊勢物語　　江戸初期刊　2冊

（丹緑本仮名草子）

9　むしのうた合　〔木下長嘯子〕
　大正14年複製（稀書複製会）寛永古活字版　1冊

10　とりのうた合
　昭和2年複製（稀書複製会）寛永古活字版　1冊

（浮世草子）

11　絵入好色一代男　井原西鶴
　大正15年複製（愛鶴書院）天和2（1682）年版　8巻8冊

12　梅若丸一代記　　天明8（1788）年刊　5巻5冊

（読　本）

13　南総里見八犬伝　曲亭馬琴
　天保年間（1830―44）刊　101巻106冊

（黄表紙）

14　五人切西瓜斬売　山東京伝作・長喜画
　享和4（1804）年刊　1冊

（洒落本）

15　吉原楊枝　山東京伝　天明8（1788）年序刊本　1冊

（滑稽本）

16　柳髪新話浮世床　初編上　式亭三馬　刊　1冊

17　西洋道中膝栗毛　仮名垣魯文等著・落合芳幾等画
　明治初年刊　15編（3.4編欠）　26冊

（人情本）

18　春色梅児与美（うめこよみ）　狂訓亭主人（為永春水）作・柳川重信画
　天保3（1832）年刊　4編12冊

（合　巻）

19　大江山酒顛童子談　十返舎一九作・国貞画
　文化5（1808）年刊　2編2冊

20　白　縫　譚　柳下亭種員等作・香蝶楼豊国等画
　嘉永2（1849）～明治16年刊　70編104冊

（狂　歌）

21　狂歌百千鳥　刊　1冊

（歌　謡）

22　よしこの京の花　3.7.9編　嘉永5（1852）年刊　1冊

（瓦　版）

23　日本飛弾国大むかで（嘉永元〈1848〉年）等3種3枚

（事典・事彙）

24　和漢三才図会　寺島良安編
　正徳3（1713）年序刊本　105巻・首尾各1巻　81冊

25　訓蒙図彙　中村之欽（惕斎）
　江戸中期刊　20巻・目2巻　13冊

（地　誌）

26　都名所図会　秋里籬島著・竹原繁画
　天明7（1787）年刊　6巻・拾遺5巻　11冊

27　日本山海名産図会　蔀　徳基（関月）
　寛政11（1799）年刊　5巻5冊

28　日光山志　植田孟縉著・渡辺崋山等画
　天保8（1837）年刊　5巻5冊

29　木曽路名所図会　秋里　籬島
　文化2（1805）年刊　6巻7冊

30　泰西輿地図説　朽木昌綱（竜橋）
　寛政元（1789）年刊　17巻6冊

31　清俗紀聞　中川忠英著・石崎融思等画
　寛政11（1799）年刊　13巻6冊

（産　業）

32　農　家　益　大蔵　永常
　（前編）　江戸末期刊　3巻3冊
　（後編）　文化8（1811）年刊　2巻2冊

（芸　術）

33　一筆画譜　葛飾北斎　江戸末期刊　1冊

34　群蝶画英　英　一蝶　天保4（1833）年刊　1冊

35　毛詩品物図巧　岡　元鳳
　江戸末期写（宋琳紫岡筆）　3帖

36　築山庭造伝
　〔前編〕北村援琴斎　享保20（1735）年序刊本　3巻3冊
　〔後編〕秋里舜福　江戸末期刊　3巻3冊

37　生花聞書　江戸末期写　2冊

38　当流　茶之湯流伝集　遠藤元閑
　元禄7（1694）年刊　6巻2冊

39　毬（まり）歌国字解　刊　1冊

（風　俗）

40　都風俗化粧伝　速水春暁斎画
　文化10（1813）年刊　3巻3冊

（武　芸）

41　稲富流鉄砲之書　写（元禄13〈1700〉年奥書）　1冊

（自然科学）

42　遠西観象図説　吉雄常三（南皐）
　文政6（1823）年序刊本　3巻3冊

43　本草会物品目録　嘗百社編　天保6（1835）年刊　1冊

（随　筆）

44　一　宵　話　泰鼎（滄浪）著・牧墨僊画　刊　3巻3冊

〈中国・朝鮮〉

45　小学日記故事大全　明・虞韶撰　胡琰画
　嘉靖45（1566）年朝鮮刊　駿河御譲本　10巻2冊

46　西湖遊覧志　明・因汝成撰　刊　12巻6冊

47　水　滸　伝　元・施耐庵撰　明・金人瑞批評
　清雍正中刊本　75巻24冊

48　西遊真詮（西遊記）　清・陳子斌撰　清刊本　20冊

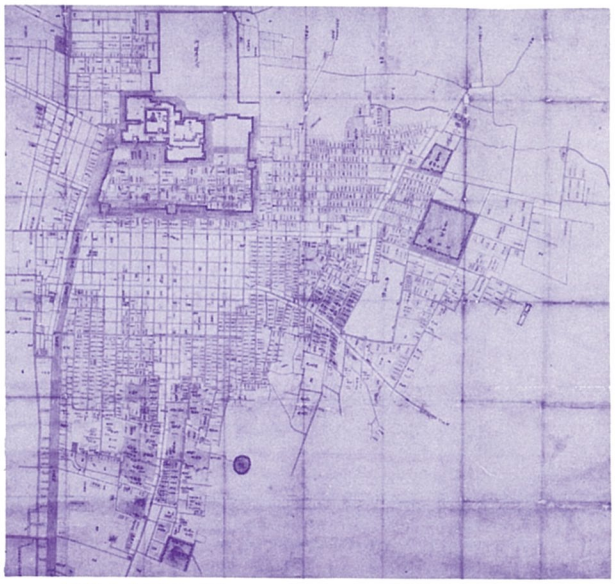
49　本草綱目　明・李時珍撰
　寛文12（1672）年翻刻（明・崇禎中刊本）56巻38冊

50　新鐫花鳥譜・新鐫草本花詩
　明・黄鳳池編　写　各1巻1冊2冊

「尾府名古屋図」解説

名古屋城下は、周知のように、慶長15年（1610）徳川家康の命令により、名古屋築城にともなって計画的に開かれたものであるが、その古図は比較的すくなく、江戸前期にまでさかのぼるものはきわめてめずらしく、現存の範囲では、万治年間（1658～61）の原図を延宝年間（1673～81）に補訂した図（名古屋城振興協会蔵）が最古といわれている。名古屋市蓬左文庫所蔵の『尾府名古屋図』もこれに次いで古く、宝永6年（1709）の作と推定されるが、単に古いというだけでなく、城下図としての内容がよく整い、記載は詳細かつおおむね正確で、総合的な価値においては、最もすぐれた標準図の一つといえる。

本図は多くの長所をもつが、先ず第一は、代表的な近世城下町としての名古屋の特色を鮮明に示している点であろう。すなわち、町割りが規則的で、城郭の南方にあたる通称〝碁盤割〟の商業地区を中心に、その東方から南方にわたって武家屋敷帯がこれを包み、さらにその外側、とくに東方から南方にかけて社寺群によって囲まれ、街路もほとんど直線的で、中世の城下町特有のジグザグ的あるいは曲線的迷路などは、あまりみられない。名古屋城自体も典型的な平城で、姫路城や彦根城のような複雑な構成はもっていない。平城とはいえ、名古屋台地の北端に築かれ、はるかに木曽川や庄内川などをひかえたスケールの大きな防衛線は、この城下の町割りに中世的な小細工を必要としなかったのであろう。なお、城下の東部にある最大の寺院建中寺（徳川家の菩提寺）や相応寺（藩祖義直の生母おかめの方の菩提寺）は、寺格の関係もあるが、堀と土居とをめぐらし、非常の場合には砦の役目をもなしうる意味があった。この点は、南部も同様で、ここには、織田氏ゆかりの総見寺や万松寺をはじめ、若宮八幡宮・性高院など、100に近い寺社が集中しているが、元来、この地域は、古渡城や前津小林城などの遺跡で、熱田をひかえた城南の要所として知られる。



尾府名古屋図〈図－1056〉（154.5×165.0cm）

さて、名古屋城下は、東西・南北ともおよそ6キロメートル、全体としては北

に広く南にせまい逆三角形をなしているが、これも地形にもとづいたこの城下個有の特色の一つである。台地上に作られた人工的都市として、自然河川を1本ももたないため、西部の低地に、南北6キロメートルの運河を開いて、物資輸送の大動脈とし、軍事上の水路を兼ねさせた。これがすなわち堀川で、城の西側から直接、熱田港に通じている。川の中ほどに納屋橋がみえるが、この時代の広小路は、長者町通りが西端で、納屋橋にまでは及んでいなかった。

次ぎに、城内の建造物、たとえば、天守閣はじめ、各櫓・門・石垣などが細密に描かれているのも大きな特色といえる。本文庫には別に享保末年ごろの城下図があり、これも、その点は比較的よく似ているが、それ以外の城下図には、自他ともにふくめて、ほとんど見られず、城郭内、とくに本丸・二の丸は空白となっているのが通例である。

ところで、本図は年記を欠いているが、これを宝永6年と推定した理由は、つぎの2点による。まず、城内三の丸に「常憲院殿」(5代将軍綱吉)の廟があるが、綱吉は宝永6年正月に病死しているので、この年が上限となるが、(尾州家公式の『御記録』宝永6年7月8日の条にも「三之丸常憲院様御廟に参拝」とある。)他方、当時の藩士で『鸚鵡篭中記』の著者として有名な朝日重章(通称文左衛門、のちに定右衛門と改名)の屋敷が主税町筋にあり、「朝日文左衛門」と記入されている。文左衛門は、宝永5年8月、定右衛門へと改名願を藩に提出しており、その許可に若干の日時を要するとしても、翌6年には、定右衛門を名乗ったであろう。したがって、この両時点の一致により、本図の成立年代は、宝永6年以前でも以後でもないという結論に達せざるをえない。なお、朝日家は享保初年、重章の死後まもなく断絶しているが、『鸚鵡篭中記』という、まれにみる貴重な大資料を書きのこした著者の屋敷を記載した図は他にみられないので、この点からも、本図の重要性がみとめられる。

本図は、かって、2、3の古地図集に収載されたこともあるが、今回の複製図は、スケールも大きく、印刷がきわめて鮮明で、細字といえども、拡大鏡を用いれば、ほとんど読みとることができる。色彩もまた、もっとも原色に近い1枚刷りで、実際の使用にあたっては、むしろ、原図よりも見やすく扱いやすいのも、長所のひとつといえよう。

(織茂)

次回展示会のお知らせ

'81.1～3月(予定)　**尾崎久弥コレクション展**

近世庶民文学を中心に、多彩な内容をそなえた本コレクションの全貌を紹介します。

蓬左文庫名品展のお知らせ

12.9～'81.2.1

名古屋市博物館において開催します。(常設展に併催)
河内本「源氏物語」(重文)はじめ、本文庫の名品、約120点を一堂に集めて紹介します。

コラム

蓬左文庫の蔵書印

その３．「尾府内庫図書」「張府内庫図書」印記

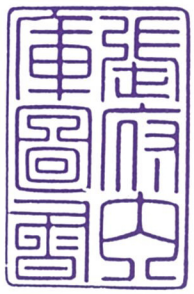
織茂　三郎

尾張家初代義直・二代光友以後の蔵書印としては「尾府内庫図書」と「張府内庫図書」の二種がひろく用いられた。それぞれ、方形（43×38㎜・42×41㎜）と長方形（75×42㎜・75×48㎜）の姉妹印があるので、あわせて四個を数える。材質は銅または蝋石で、徳川美術館に現存している。

「尾府」も「張府」も、いうまでもなく尾張藩庁の所在地という意味で、尾張という文字を上下に分けたにすぎないから、語義にちがいはないが、学者、とくに漢学者は、尾府とか尾州とかいう表現には和臭があるとして、張府・張州などと称するのを好んだようである。書名にも、有名な『張州府志』(松平君山等編）や『張州雑志』(内藤東甫著）などの例がある。ちなみに『張州府志』には「張府内庫図書」、『張州雑志』の方は『尾府内庫図書」の印が捺してある。

上述の印は、江戸中期に作られたようであるが、さかのぼって、初期の古い蔵書、たとえば『帝鑑図説』(駿河御譲本）や『竹取物語』(古写本）などにもそれらの印記がみられる。もちろん、あとから捺したもので、一般に、和書には「尾府内庫図書」、漢籍には「張府内庫図書」の印記が多い。

「尾府内庫図書」印記（原寸）



「張府内庫図書」印記（½）

（おりも　さぶろう・蓬左文庫調査研究員）

名古屋叢書三編収録書目について

先に「名古屋叢書三編」の編集開始についてお知らせしたが、その全体構想についてはしばらく時間をいただくとして、本号では今年度末に刊行する第１回配本と、来年度の第２回配本について、その収録書目をお知らせしようと思う。

第１回配本には、尾張における崎門派の儒学者、細野要斎の随筆「**諸家雑談**」と「**家事雑識**」を収録する。要斎の著書(「葎（むぐら）の滴（しずく）」という総題のもとに叢書のかたちをとっているものが多い）はすこぶる厖大で、この内の代表作、「感興漫筆」は、すでに「名古屋叢書（随筆編）」中、４巻にわたって収められているが、資料的価値の大きさから、さらに要斎のものをとりあげた。前者は、天保15―明治６年にわたる要斎の見聞録であり、後者は、主に安政３―文久４年にかけて、藩士及び学者としての細野家内部の出来事を記録しており、「感興漫筆」の別編をなし、その裏面を示すもので、いずれも自筆稿本とみられるものを底本とした。編集担当は杉浦豊治氏。

第２回配本には「**張州年中行事抄**」「**尾張童遊集**」「**尾張俗諺**」の三種を収録する。「張州――」は、小畠広林・横井時文の手になるもので、題名の通りの内容であるが、特に寺社の縁起と俗諺に詳しい。「童遊集」(小寺玉晁著）も、その名の通り、子供の遊びを図録したもので、天保２年に成立し、昭和９年には名古屋温故会により翻刻されているが、現在、入手がほとんどで不可能なため、再翻刻を決定した。「尾張俗諺」は嘉永４年の写本で、今回初めて翻刻紹介される。以上、いずれも尾張の風俗資料として役立つことと思う。編集担当は芥子川律治氏。

出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S.50年刊)	3,500円	名古屋叢書続編総目録(S.44年刊)	400円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S.51年刊)	4,000円	**善本解題図録第一集(近日再版)**	**300円**
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(S.51年刊)	2,500円	**同　第二集(S.55年再版)**	**300円**
		同　第三集(S.55年再版)	**300円**
尾崎久弥コレクション目録第一集(S.52年刊)	1,500円	蓬左文庫重要文化財図録(S.52年刊)	200円
同　第二集(S.54年刊)	1,500円	日本の古典〈蓬左文庫図録〉(S.52年刊)	200円
同　第三集(S.55年刊)	**1,500円**	蓬左文庫・源氏物語図録(S.53年刊)	300円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S.53年刊)	2,000円	**蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1 「尾府名古屋図」(S.55年刊)**	**1,800円**
名古屋叢書続編　索　引(S.47年刊)	700円		

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。電話 (052)935－2173

★「善本解題図録」の再版ができました。これは本文庫の善本（貴重図書）について解説を加えたものですが、第一集には駿河御譲本の内から和書三十種が、第二集には同じく漢籍三十七種が、第三集には日本古代の古典三十種が収録されています。

★「尾府名古屋図」の精密な複製を作りました。3、4頁に詳しい解説を載せましたのでご覧下さい。

▷▷▷ 利用ご案内 ◁◁◁

▷開館時間　午前9時30分～午後5時

▷休館日　毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)

祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館 / 月曜　〃　月・火休館)

▷閲覧　館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書　無料
重要図書　有料(1部100円)

▷展示　常時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)

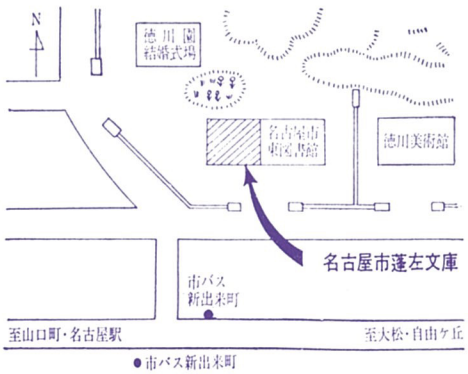
▷複写サービス　普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないます。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影等の申請を受付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町2-27

☎ (052)935－2173

(市バス 新出来町 北 100m
山口町 東 500m)



「蓬左」第4号　☆昭和55年10月1日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町2－27)
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：大同印刷(東区泉2－3－18)